



## Prologue

---

はっきり言うと、自分は「社会不適格者」だろう。

仕事が長続きしない...とにかく転職回数が多い...1社の勤務期間が短い...派遣社員期間が長すぎる...。そのため、現在になって就職活動でしわ寄せがきている。退職から1年たっても決まらない...

今回はさまよいつづけた12年を振り返ってみたいことにしたい...。自分がどれほど社会に適応できない人間かがわかり、就職が出来ないことがわかると思う。

そういったことをすべてさらけ出して見た。

## 就職氷河期のすき間。

---

自分が大学を卒業したのは1998年3月。ちょうど「就職氷河期」の真ただ中の世代である。しかし、自分の世代は少し特殊で「就職氷河期の氷が少し解けた年」とも言われる。ちょうど「2000年問題」が表面化し始めたころ。各コンピュータ会社は2000年問題の対策で大量のプログラマを採用し始めていた。要は「石を投げればコンピュータ会社に当たる。」と言った感じ。必然、就職活動もコンピュータ会社を中心に選んでいた。

当時、自分の応募は都内で行われる合同説明会を中心にコンピュータ会社にアポを取り、週に4社から5社は試験を受けていただろうか…。しかし、それとは裏腹に内定は取れなかった…。ガチガチの文系の自分には正直それでも「すき間」すらないということを感じていた。

そんな中、ある会社から内定をもらった。都内のあるコンピュータ会社である。当時は会社訪問の解禁が撤廃された初年度…。とはいっても、大学4年生の2月か3月あたりによく会社説明会が開始されると言った具合で大学3年生から始まる今の就職活動に比べればのんびりとしているかもしれない。内定は1997年7月にももらったから、実質期間は5カ月で済んだ。応募は500社以上したけど…。それも自分の場合は変な内定の出方をして、先に社長の講演会のお知らせの手紙が来て、参加した後にその場で「手違いがあった」ということで内定が出たのだ。

その後、秋から新人研修が始まった…。「新人研修」とはいってもパソコンがあってプログラミングをするだけ…。「コンピュータの知識は問わない」と言ってもそこには「格差」が生まれる。出来る人間がとことんまで出来て、先輩社員も期待をするが…自分のようなプログラミングになれない人間は何も声をかけられない…。入社前から「戦い」は始まっていると言っている。

1998年3月に大学を卒業。この年の学部内の就職率はかなり良かったはずだ。就職課がかなり熱心だったのと、コンピュータ業界や車のディーラー、飲食店関係の3つの仕事がかんりの新卒者を採っていたからだ。したがって、この年は「就職氷河期の氷が割れた年」とも言われていた。みんなこの後の「悲劇」も知らずに…。

## 激務1～入社～

---

1998年3月に熱海にある会社の保養所で1泊2日の宿泊研修。その後、4月1日に入社式が行われ、翌2日には都内にあるシステム本部で配属先や本部での待機者が決まった。

コンピュータ会社の仕事は「プロジェクト」単位で動いている。そのプロジェクトの客先に向かい仕事をするのが通常である。その配属にあぶれたものは「待機」といい、都内のシステム本部でプロジェクト配属に向けて研修をすることになっている。「研修」といっても別に講師がいるわけでもない。自分たちで本を持ち込み「自習」と言った言葉が適切である。まさしく「放置プレイ」といっていい…。

自分も幸いプロジェクトに配属が決まった。そこは某携帯電話会社のプロジェクト。昼過ぎには自分を含めて、新人6～7人が都内にある会社が作った、自前の開発施設に向かう。割り振られた席に座ってしばらくすると、現場責任者のA次長を司会に各自の自己紹介が行われた。その際にA次長はこういった。

「原則夜9時まで帰宅できないし、徹夜もある。土曜の休みもあきらめてくれ。」

もちろん、その日も9時までしっかり残された…何もやることもなかったが…。しかも、4月4日には見に行こうとチケットを取った「アントニオ猪木引退試合」も断念した。仕事運のなさのすべてはここから始まったといったらよかった。

## 激務2 ～結果が出ない日々...～

---

1998年4月の入社以来に激務の日々が続いた...。連日9時10時まで残業の日々...。当時残業代だけは出ていたため、基本給の倍以上の給料をもらっていたこともあって、カネ回りだけは良かった。そんな中6月からは神奈川県某所にある研究所に通うことになる。最初のうちは徹夜での作業...。しばらくすると自宅には帰れなくなり連夜ビジネスホテルに滞在することになるのはまだいい方...最後の方は研究所の長いすで寝ていた。23歳の誕生日も研究所で過ごした。

最初のうちはまだ会社側もフォローをしてくれていたが...すぐにそれもしてくれなくなった...。それどころか上司は「豹変」を始める。社内においても、電話でも怒声、罵声が飛び交うようになった。作業でも結果が出ないとなおさらのことだった。秋ごろになるとそれが顕著になる。何を話しても怒声が飛んでくる...。そんなことをやっているから上司と話しをしなくなっていく...。そういう上司に限ってえらそうにしている仕事をしているわけではない...。

1998年10月になった...。作業に一段落ついた。しかし、数日後プロジェクト全員でミーティングが行われ、神奈川県の研究施設常駐が決まった...。もう家に帰ることは不可能になった...。気づくと半年ほどで新人の半分は辞めていた...。

研修施設には数週間いた。毎日のようにホテル住まい...。土日はなし...。しかも、会社側からのフォローはないどころか...電話での怒声が毎日のように飛ぶ...。同行していた派遣の人は仕事のできない自分にあきれかえり、ほとんど話しすらしてくれなかった...。その人こそ研究施設の休憩室に居座って、自分に仕事を押し付けたにも関わらずだ...。

数週間後、自分だけその研究施設を追われた...「強制送還」だった...。

## 激務3～プロジェクト追放～

---

神奈川県の研究施設を追われた後は、さしたる仕事もできないまま...1998年が終わり、1999年になった。年明けすぐにある派遣社員に頼まれて、またしても神奈川県の研究施設に深夜作業で通い詰めることになった。どうも前の担当者とそりが合わなくなったとのことだ。

その人とは最初のうちはうまくやっていた。しかし、1ヶ月もやっているうちにその人の「素」が出てきた。とにかく怒鳴る...。そのわりに当の本人は仕事はほとんどしない。その割に偉ぶっていて自分はアゴで使われていた...。ひどい時は会社に電話で報告した時にその人の名前を出しただけで怒られた...。「俺は電話は嫌いだ！名前を出すな！」と...

1999年4月になると新人が大量に入ってきた。それ以後は上司からは「お前は終わりだ」と連日のように言われていた。同期とも仲たがいが続き、「あいつとはもう話すな！」と言われ、少しトラブルがあって仕切ると「先輩面するな！」といった状況になっていた。人間関係は最悪だった。その年のゴールデンウィークは休みはなかった...。その派遣の人との仲は日に日に悪化していく...。もう心身ともに疲れ果て1日だけ休みを取った。それだけでも怒られた。次長からは「結果を出さないヤツに休みはない！」とはっきりと言われた。勤務時間は連日30時間を超えた。徹夜をしても上司は「二徹三徹はあたりまえ。」と突き放され...。結果を出せないものにはとことんまで落とされると同時に力のあるものだけ生き残っていった...

6月。ようやく仕事が落ち着いた。ある日次長に呼ばれた。職場近くの喫茶店...。主任もいた。

開口一番こう言われた。

「君の評価は下がりつつある。そこで異動することになった。」

実質上の「追放宣言」だ。その後クドクドと文句を言ってきた。負けずに自分も今までの派遣さんや周囲のやってきたことを抗議した。しかし...派遣相手では怒れないのだろう...

「それは君を育てようと思ってやったことじゃないの？」

と、まったく取り合ってくれなかった。

数週間後に自分を含めて数人でそのプロジェクトを去ることになり、「送別会」が行われた。しかし、その際ある別の派遣の人が自分を指差し「今回の作業の遅れはお前の責任だ！」とはっきり言われた。これが今までの仕事のすべてだったと思うと悲しくなった...

数日後24歳をむかえた...